

平成25年度 病虫害防除技術情報 第2号

平成25年8月1日

大分県農林水産研究指導センター

農業研究部

夏期高温期の病虫害対策について

本年は、梅雨期間中の降水量が平年に比べ多い地域があり、7月の気温は平年に比べかなり高く推移しています。また、向こう1か月の気象予報によれば、気温は平年に比べ高いと予想され、下記病虫害の多発が懸念されます。降水量は平年より少ないと予想されていますが、突発的な豪雨が発生することも考えられるので、病虫害の発生に注意し速やかな防除に努めましょう。

1 夏期高温期に注意を要する病虫害

	作物名	病虫害名	留意点および対策
病	白ネギ	軟腐病	・多湿条件下で多発するため、圃場の排水をよくする。
		白絹病	・過度の土寄せは発病を助長するので、避ける。
	イチゴ	炭疽病	・病斑の早期発見に努め、発病株の周辺の株も含め処分する。 ・水はねで伝染するため、頭上灌水やスプリンクラーは避ける。 ・窒素過多は発病を助長するので、適正肥培管理に努める。
	水耕ネギ ・ミツバ ・セリ	軟腐病 根腐病 (ピシウム菌)	・発病株を早期に除去し、養液槽内での蔓延を防止する。 ・パネル等の資材消毒を行う。 ・養液冷却装置等で液温の上昇を抑える。
虫	水稻	トビイロウンカ	・晴天が続くと多発しやすくなる一方で、猛暑時には発育が抑制される。夜温が低下する8月下旬以降に急速に生息密度が上昇するので、基幹防除を怠らず確実に実施する。
		斑点米カメムシ類	・高温・少雨が続き多発しやすくなるので、基幹防除を行うとともに、上記好適条件が続いたら追加防除を行う。 ・普通期水稻では出穂14日前までに水田周囲の除草を徹底する
	大豆 野菜類 花き類	ハスモンヨトウ	・露地作物では、晴天が続くと多発しやすくなるので圃場の見回りを定期的に行う。 ・大豆では白変葉が多数見られたら速やかに薬剤防除を行う。
	野菜類 果樹類 花き類	アザミウマ類 ハダニ類	・高温・乾燥条件で多発し、急激に生息密度が上昇するので、圃場の見回りを定期的に行う。 ・薬剤防除では、初期防除とローテーション散布を徹底する。
	飼料作物	アワヨトウ	・新規開墾地では、晴天が20日以上続くと多発した事例が多い。特にイタリアンライグラスで被害が多い。 ・終齢幼虫が多発すると作物を食い尽くした後に、圃場外に集団移動する。 ・若～中齢幼虫期に圃場全面を作物ごとすき混む。

2 病害虫防除の考え方

(病 害)

- 1) 病害の発生が見られる圃場では、治療効果のある薬剤を散布した後に、予防剤を中心としたローテーション散布へと移行するのが効果的である。
- 2) 施肥量の過不足により病害の発生が拡大する場合がありますので、適正施肥に心がける。
- 3) 台風の接近に際しては、接近前と通過後に薬剤散布を行い、病害の拡大を防止する。

(虫 害)

- 1) 晴天が続くことも想定されるため、薬剤防除では残効期間の長い薬剤を選定する。
- 2) 施設栽培では、可能な限り防虫ネットなどを設置し、害虫の侵入防止を図る。

3 防除上注意すべき事項

- 1) 薬剤によっては、高温時に薬害を生じやすいものがあるため、散布時間や天候、使用する展着剤の種類等に十分注意した上で散布を行う。
- 2) 防除薬剤は、大分県農林水産研究指導センター農業研究部病害虫チームホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」（下記アドレス）を参照し、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守する。なお、薬剤によっては指針の更新日以降に登録内容が変更されている場合があるため、薬剤のラベルに従って使用する。

（ホームページアドレス <http://www.jppn.ne.jp/oita/>）